

方法論的必然であったが、より独自の段階が期待されてもよいのではないか、一般史、美術史、その他によって傍証される服装史の歴史的年代で未解決な問題もより新しい方法によってあるいは多少の解決を期待出来るかもしれない。今回は衣服構成学上の知識すなわち、着衣、脱衣、固定、運動機能等の観点をよりどころとして、讃岐出土伝えられる銅鐸人物画の衣服形式を考証し、わが国先史時代の衣服に多少の考察を試みた。

## 62. 讃岐出土と伝わる銅鐸人物画の衣服形式と衣服構成学上の観点

岐阜女子短大 福本 慶子

服装史は過去の服装に関する博識ばかりでなく、現在の服装を、過去から現在に至る従の系列に於て理解しようとする学問である。方法論的に考えると、資料考証の次に来るものは、それら歴史的衣服の形式と服装の様式（美しさ）の考察であり、位置づけである。服装は発達する形式と変遷する様式（それぞれの時代における自己燃焼的な）の複雑なからみあいの中に成立しているから、それを分せきし、理解した上でなければ服装史自体の歴史性によって、各々の服装を歴史の上に位置づけることは出来ない。歴世の限られ文献的考証のわくを越えて、考古学や民俗学的方法が服装史にもたらされたのも